

植物エッセイ

大平 仁一*

里山で輝く白い花ムシカリ

人間はいつの世にも美しいものに惹かれている。私もその一人だ。奥山で珍しい花に出会うのもいいが、里山ほどうれしい所はない。いつの間にか心が洗われていた。下の黄色いアマナは里山と田んぼの中間に柿の木の近くの水場に咲いていた。北信濃にある。発見は孫に教えられた。

ムシカリは毎年私の癒しになっていて、この里山に春になると咲く。里山の散歩には近所の子供10名ぐらいつれて遊びに行くと、子供からめずらしい花や昆虫を見せられていた。帰りに「ノビル」を取り持って帰る。あの味噌いためはほんとうに美味しい。

子供たちは、むじゃきで木にぶらさがってゆらしたり、咲いている花を「おれ、知っている」と言って自慢していた。私はそんな子供が自慢だった。(写真1、2)



写真1 キバナノアマナ



写真2 ムシカリ

靈感が私を呼ぶ

万仏山は飯山の里山で霊山である。この奥に杉があり、その奥に「山部社」があり、地元の祭りの元祖である。又奥へ登ると奥社があり、道案内に千手観音の仏像が三十三体ある。山のさみしさをやさしくする「山ユリ」の白く咲く花があり、人々にうれいを与え、観音さんが道しるべの役をはたしていた。

春の「ミヤマイラクサ」や「コゴミ」など地元の人たちの山菜採りの場所でした。今は少しずつ山ユリも見えるようになっていた。この観音さんの背に当時の人の名前が記されていた。右エ門とか昔の人の名があり、なつかしく思いつつ足にからまる植物のやさしさを感じ、私は岩屋のお堂に一礼した。(写真3)



写真3 山ユリ 万仏山の三十三千手観音の一部

テンナンショウ様々

信濃の東側に多く咲く「テンナンショウの類」は数多くいろんなものがあり、里山を走るのがたのしい。私は友人という友人とつれ合い、杖の私にはうれしかった。そして友人にアイスをプレゼントした。友は私の足の運動と心の癒しにと、時々さそってくれた。夕方帰ると妻が手料理で待っていた。友人も満足していたらしく、話がはずんだ。

近くには花がたくさんあった。春に行くと、イチリン草、キクザキイチゲ、イカリ草、キブシ、アブラチャン、サクラ、フクジュソウ、ノビル、アサツキ、セリ、エンゴサク、ショウジョウバカマ、ハシリドコロ、タンポポ、ヒメジオン、オオイヌノフグ

* 大平 仁一 〒389-2322 飯山市瑞穂1166-9

リ、カタクリ、ヒトリシズカ、オドリコ草、シュラン、時にこぶしの花、以上。

これを写したのは私だった。また秋に来た。老母ユリの花穂はみごとだった。

友人が帰った後、私も妻にお礼を言い、ベットでねむった。(写真4)

テンニン草 (*Leucosceptrum japonicum*)

黒姫山と妙高山、その中間にある苗名の滝はそれは見事な景観であった。「アツモリ草」の群生も妙高にあり、黒姫山には「ミヤマザクラ」もあり、日本の大切にしたい植物である。その中で私は、この山で栃の実ひろいをしていた。私は熊の道近くで3人くらいで走っていたとき、うす黄色の花をした「テンニン草」を見つけた。

はじめ「シモバシラ」とまちがえた。道の右はじに背の低い花をつけ、かわいらしい「シモバシラ」と思った。後に「テンニン草」とわかり、いっそう愛着がわいた。この花があちこちに咲いている景色はすばらしく、きれいに増えてきた。砂利や土の道に傾いて咲く。この花は私に美しい心を浮かばせてくれた。横にはっているのかなーと思うその葉っぱの横は崖になっていて、苗名滝のすさまじい音が聞こえていた。ちょっと木や木の間から見える滝の白い部分は、まぼろしのように写っていた。いつまでも残したい植物である。

シダ植物

万仏山にはシダがたくさんあり、春は山菜採りにいそがしい。シシガシラやクジャクシダ、ジュウモンジシダ、クサソテツ等、多くある。この山のシダは大きいので、すぐわかる。スギナやトクサやヒカゲノカズラはブナ林にあり、フユノハナワラビやナツノハナワラビは里山にある。最近山シダが少なくなり心が痛むのだ。クサソテツは飯山の山菜の代表的なもので、地元では「コゴミ」として知られている。また、イヌワラビやシシガシラはまだ成長がよかった。胞子が葉にあるもの無いもの見分けたいものだ。湿原地帯にたくさん生育していた。シシガシラは乾燥地に生育していた。(写真5)

ヤマシャクヤク (*Paeonia japonica*) の増加に心うたれる山

退院して早く行きたい里山へ友人に連れて行ってもらった。標高700m、緑の香りの中進み、あの5年前に見た場所へついた。すぐ友人は声をあげた。「すごいなー、大平、宝の山だな。時に病も心の宝だな、お前病になった事で得るものたくさんあったな・・・」と言われた。でも、何故ここにまとまって咲いているのだろう。いつもなら2mほど離れてポツンポツンと咲いているのに不思議に思った。ただ昆虫がたくさんいた。昔はヤマシャクヤクの根は漢方薬として使用した事がわかった。ただ花の美しさもさながら葉の形や葉脈のちがいのあるシャクヤクにおどろきました。

山では、母ちゃんの握った「おにぎり」を食べ、地元の「芋ナマス」を食べながら雑談をした。私と彼はこの場所をヤマシャクヤクの花園にしようと秋に種をまきました。花はその時に写したものです。(写真6)

日本最小の鵜飼に会い、そして山ユリの群生地に会おう

Met the smallest troglodyte of Japan and a clump of *Lilium Auratum*

気晴らしに万仏山へカメラ片手に出かけ、あの熊のツメあとの残るコナラやクヌギの林に入った。あっちこっちに山ユリが咲き、香りがした。私はよろこんで近くへ行ってさわったら花がシャツに付き、花粉の色がついてしまった。少し蟬の音がする静かな里山だ。

その日の午後、鍋倉山へ。僕の秘密の場所へ苔むした石の川を登ると、川の石の草や苔の中に巣を見つけた。近くでよく見るとミソサザイの巣だった。少し時間をかけてみていると親子の絆が見える。一時間もいてしまった。足がしびれた。最近なかなかみれない鳥である。自然の姿のありがたさにむね打たれ、上の湿原に行くと、ブナ林の近くのナベクラザゼンソウの葉が60cmもの大きさになっていた。湿原の水面は水中ガラスのようで底が見えた。(写真7)

深山の湿原に咲く

初夏のブナ林は心が洗われる。私と孫と6人で行く山の上の沼池。その場所は孫たちの遊び場だった。子リンゴの間に「ザゼンソウ」や「モリアオガエル」の卵のうがあり、自然のいい所でした。孫の手にサ



写真4 テンナンショウの類



写真6 ヤマシャクヤク



写真5 サカゲイノデ (大きく生長する山のシダ)



写真7 山ユリ

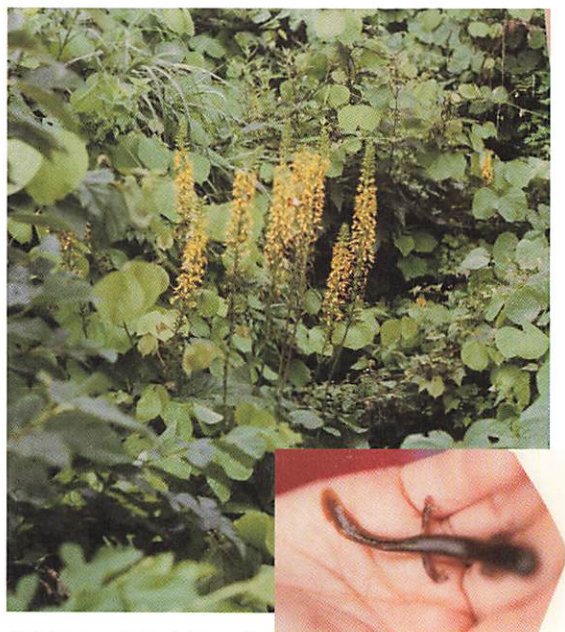


写真8 オタカラコウ *Ligularia sibirica*



写真9 ホタルブクロの類

ンショウ魚かカエルの子がのっけていて私に見せてくれました。「おじいちゃん、これなんだ？」その声がうれしかった。少し登って、湿原のある川に行くと草が茂っていた。清流の美しさに見とれていると、そこに「オタカラコウ」が黄色に咲いていた。近くに「白セキレイ」が止まっている。

私の元気はここからはじまっていた。(写真8)

ホタルブクロの生態とは

長野県の北信は千曲川を東西にして不思議が多く、例えばイカリ草の類やホタルブクロの類は西から海岸に向かい白色の花、千曲川より東は赤ないし桃色なのにとまどった。ブナの葉は雪の多く深い所は大きい。又クロモジも雪の多いところは大な葉だった。又めずらしい花ではコミヤマベニカタバミはすばらしい群生で私を驚かせた。又、コケイランが日陰に1本10cmの高さに黄色の花が私を引きつけてくれた。(写真9)

五宝木のトロコ跡に咲く石楠花

山田せき様より手紙をいただき秋山へ母ちゃんと出かけた。今日いつも上田にいる娘さんにお世話になっている私は喜び勇み出かけた。3時間も手打ちのそばや栃もち、きの子の煮物等いただきました。せきさんはいつも絵手紙でした。山田さんのすぐ裏には岩ウチワ (*Schizocodon uniflorus*) やシラネアオイ (*Glaucidium palmatum*)、ムシトリスミレ (*Pinguicula vulgaris*)、ミツバアケビ (*Akebia clematifolia*)、アキグミ (黄) (*Elaeagnus crispa*) ショウジョウバカマ (白ピンク) (*Helonias orientalis*)、ナツエビネ等が色とり咲き、目立ったのは石楠花のピンク色でした。お昼におばさんの手作りの舞茸をごちそうになり、母ちゃんの運転で帰ってきました。(写真10)

年上の人に癒しをもらう

2年目もすぎた春、宅老所にいる私をたずねてきた女2人。看護師によれば車いすで入口に行くといふ才年上の隣の部落の知的な女^{ひと}だった。とつぜんのうれしさに私はニヤニヤしながら会った。聞くと私のいる宅老所の前が麻酔科で、その人は足が病むのでそこにいつてどことなく耳にしたので、もう一人の友人と来たとの事。30分ほど話した。ほんとうにうれしかった。2人はほんとうに楽しそうに笑顔

を私に見せてくれた。廊下には「キルト」展がかけであった。ここは2階であり、すばらしい心の人がいたとは考えていない私ははずかしかった。よく考えるとこの女たちも里山が好きで、よく一人や二人で万仏山へ行くらしい。やはりすてきな人だと今私はわかった。二人はヒューマンリレーションのすばらしい人であった。今日ほど私にすてきな心の癒しのプレゼントをくれた人はいなかった。妻に話すと「父ちゃん、いい人たくさんいて幸せね。」と言った。その夜、車いすで茶の間から外を見ると、お月様が母ちゃんに見えた。池の木に鷗鷺がチューチューと鳴いていた。一匹だけの鯉がさみしそうに動かなかった。寒くなったので、車いすでベットへ行きねむりについた。

夢は心地よかった。今日のあの人達はどうかしているかな・・・

聞くと、小泉武栄教授のおねえさんの順子さんだった。

まむし草はしめった所に

好きではない草の代表的なものの一つと、私達農村のものは皆そう言っていた。仏炎についている1本の花穂がいやに気になった。それでも写真にうつした。なぜか目につくこの花の不思議とさびしさにふれた。杉林をぬけて山の道を歩いていると「ノブキ (*Adenocaulon himalaicum*)」が少しあり、砂利道の感触にふれていた。又「mamigusa」が道の近くにあった。前方より一人の若者が来た。「今日は」と言った。私も返答し「今日は」と言う。聞くと、足の運動だという。かれこれ一年にもなる。

やりすごしていた「mamigusa」も見なれると美しさが私を引きつけていた。植物も人間も好き嫌いにされる淋しさが増している。私ももてたい人間なので、この花の気持ちがよくわかる。この前mamigusaに聞いてみると、この花は「うれしい」と私に言ってくれた。「君といっしょなら、おれ幸せだよ」と、葉っぱから涙を流して言っていた。(写真11)

ハイハマボッサの生長ぶり

鍋倉山 (1.288 m) のある池にこの植物があった。それは高橋勸先生と10年前に行く。その時は少なかったが、現在 (2007年7月) に現認に行くと、すばらしく増えていた。小さいが、生きようとしていた姿は私と同じと思った。この時、林をありがた



写真10 ハクサンシャクナゲ (*Rhododendron brachycarpum*)



写真11 マムシグサ



写真12 ハイハマボス



写真13 トチパニンジン *Panax japonicus*



写真14 コケイラン *Corallorhiza patens*



写真15 常緑樹

く思った。林の中には「チシマザサ」の多さにおどろいた。この「ハイハマボス」を将来大切に生育しておく必要がある。この地には「オオイワカガミ」や「白イワカガミ」があった。友人と二人で語り合いながら楽しく歩く。でも、「ハイハマボス」が気になり、この大切な植物をどうやって大切にしたら良いか、私にはわからなかった。誰か良いアイデアをくれないかーと心で思った。(写真 12)

奥信濃千曲川西にトチバニンジン群生

不思議に思うのは、千曲川東の万仏山には「ツルニンジン」がたくさん生育していたが、西の山には「トチバニンジン」が群生していた。それに、東には「シジミ」や「沢蟹」が住み、西には「モリアオガエル」や「岩魚」や時に「鮭」もいる。そんな所にこだわりたい。ブナの葉も他より大きい。その為、腐葉土がたくさん作られる。その土から昆虫が生まれ、土の栄養が多くなる。水分が出て、植物が育つ。うれしい連鎖反応だ。東の小川にはクレソンが春先必ずみられる。山から流れ出る川には岩魚がおよぐ。そんな所が私はうれしい。大切にしたい、この信州の飯山には7月蛍が飛びかう。それも平家蛍と源氏蛍の両方がいる。日本の緑はすばらしい。川二ナと言う貝からあんなホタルの美しい昆虫が私達を楽しませてくれる。そんな私でも栃葉ニンジンの実を小さいビンにいれ砂糖酒で保存し3年のんでみた。(写真 13)

コケイランは里山に出現か

私の発見は12年前の斑尾～鍋倉山周辺でした。その時はうれしかった。バルブ(球根)は小さく、花はうす黄色で葉は1本又は2本でした。その時はあまりなく、近くを石で囲みわかるようにした。平成19年、母ちゃんと近くの空き地の「カラマツ林」へ「うど」取りに行くと、その林の中に群生していてびっくりした。所々に点々と咲いていた。少し足の悪い私はうれしく早足になると、ころびそうになった。「うど」は多くとり、すぐ近くの道まで持ってきて、家で食べた。ここは山栗をたくさんひろう秘密の場所でした。こんな里にも増えているのは自然なのだろうか？清津峡で買った「山野草への招待」の著者高木国保先生の本には「ササエビネ」と出ていた。今だにわからない私です。(写真 14)

人間より強く生きる常緑樹

私が志賀の信州大学志賀研究室の山の中へ母ちゃんに行ったとき、少しさみしかった。深く入ると動物のなき声が。奥へ奥へ進むと多種多様な木や植物に出会った。

腐葉土が多いせいか、やわらかく動きにくい。所々に常緑樹の「シラビソ」や「コメツガ」等がある。常緑樹がこの山を守っている。又大石を我が母と思ったのか、この石を守った松も涙ぐましい努力をしている。自然とはすばらしい。人間よりも美しい姿を見せてくれる。人間が手を入れた道路がいつか崩壊する。その時のつごうでつくる私たちはまちがっていると思う。

この場所で私はうれしい発見をしたのです。(写真 15)

あの花に山で二度合う

毛無山へ山菜採りに出かけた。友人と二人楽しい1日になりそうだった。今日はこの山の「キヌガサ草(*Paris japonica*)」の群生の確認と調査に向かった。所々に「ツバメオモト(*Clintonia udensis*)」がいきおいよく白い花を空に向かって咲かせていた。一人の彼は私より先に登っていく。少しうしろを登る私に声をかけ「オーイ、この花なんというの」遅れて着く私は「シラネアオイだよ。きれいだ。君よく見つけたな・・・」と声をかけてやった。うれしそうに笑ってくれた。そこから100m登った所に「キヌガサソウ」が見えはじめていた。大きい葉っぱを空いっぱい広げて小さい花をつけていた。一本少し掘ってみると球根だった。うめておいた。彼も野草が好きでうめてくれた。今日の気分はこの花のようでした。去年は私の発見した「ニリンシラネアオイ」はめずらしいが、今日でシラネアオイの群生は2度目でした。ブナ林はほんとうにすばらしい。一年中、休みには彼と出かけるのが私の癒しになっていた。この地に腰をおろし話に夢中になっている。ふとすぐそばを見ると「アベマキ(*Quercus variabilis*)」の実がころがっていた。その実は私の心の美しい宝だった。(写真 16)

(追想) 日本最小の鵪鶉に会い、山ユリの群生に出会う

Met the smallest troglodyter of Japan and a clump of *Lilium auratum*.



写真 16 シラネアオイ (*Glaucidium palmatum*)



写真 17 ヤマユリ *Lilium auratum*



写真 18 鷗鵲

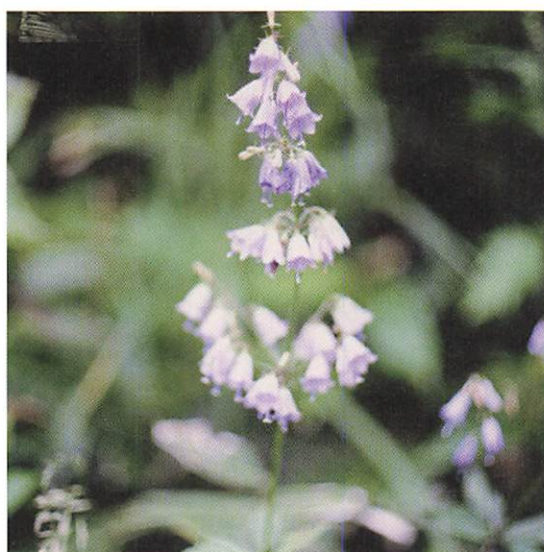


写真 19 ツリガネニンジン
Adenophora triphylla var. *japonica*



写真 20 種から 2 年目の白根葵 (シラネアオイ)
Glaucidium palmatum



写真 21 ヒトツバタゴ (別名ナンジャモンジャ)
Chionanthus retusus

気晴らしに里山道に車に乗せてもらい行った。万仏山、神戸山、小菅山。行く所で目につく花、それは私の大好きな山ユリでした。熊の爪あとの残っているコナラやミズナラやクヌギの林のすぐ近くの草の中に純白の山ユリが私の病身に笑っていた。そして、こちらへ来いと頭をゆらしていた。香りがすてきなで近くへ行くと、花びらの花粉がシャツについた。山のマイナスイオンと花の香りでリラックスできた。

どうしてこんなに山ユリが増えたのか、私にはわからなかった。3年間病で山の事はわすれていた。今そのすばらしさを再びよびおこしてくれた。林の間からはブルーの空が蟬の声と共に私を励ましてくれた。それから、秘密の苔むした場所の鍋倉山へ行った。

鍋倉山へつく。苔むした石が多くあり、川を登る事10分あまりの草やチシマザサの石の近くに巣があった。よ〜く見ると、小鳥が数羽チッチッチと鳴いていた。私は5歩さがり少し見つめる事にした。30〜40分後親鳥が来た。でも小さい・・・すぐ考えついた。日本最小の鷓鴣だった。誰が見てもきれいなと思われぬ、かわいそうな鳥だ。そんな思いをいだき上へ登った。ブナ林の中にすきとおった川が流れている。白いブナは幹に墨汁を流したように見えた。川は深さがわからない。あまりにきれいで、底がすぐ見えるが手が届かない。水草がゆらゆらしていた。あたりを見わたすと、1mぐらいのザゼンソウ(*Symplocarpus*)が群生し、近くに(シラネアオイ)や草花が花園のように咲いて、私の心を癒してくれた。因に(ナベクラザゼンソウ)でした。帰りに水深を棒で測ると1m以上あった。川幅は50cmでした。

おにぎりを食べて又川を下り鷓鴣の巣に別れを言い帰路についた。(写真17、18)

奥志賀高原に咲くツリガネニンジン

千葉の川村先生と母ちゃんと私の3人で奥志賀へBMWで行った。道端を見ていると行く道すじにツリガネニンジンが咲いている。岩魚の原種の住む川の近くにも咲いていた。志賀音楽堂の近くにはみごとに咲いていた。06年07年も多かった。この奥にはふしぎに熊の巣を2ヶ所でみつけた。草をふみつけてあった。

川村さんは楽しそうだった。娘さんは3カ国語しゃべるので外人と会うのがより楽しかった。

ニュージーランドに住んでいたのも、日本と反対の季節だそうです。犬も連れてきた。この道は秋山の「切明」までつづいていた。川村さんに母ちゃんはツリガネニンジンを教えていた。川村さんはカメラで写した。2年前より少なくて残念だった。花・花・花、ツリガネニンジンよもっと咲け咲け・・・冬に奈津奈さんは私にマフラーをもってきてくれた。メーカーはle.coeur blanc だった。(写真19)

植物は故郷が恋しい

ある種子を3年も箱に入れて出すのをわすれ、今年出して蒔いた。見事に芽が出てくれた。下の写真、これを家で植える。2年〜3年は咲いていたがいつの間にか消えた。その時の苗を生まれた場所に植えておいてみた。シラネアオイ(*Glucidium palmatum*)の苗であった。檜(ナラ)やコナラやミズナラやカバノキや桂ノ木が多くあった。私はこの斜面に植えてみた。それから忘れていて、6月に退院して行ってみた。標高800mくらいでした。

もう5年もたち、昔をわすれ、自分をわすれ、「エッセー」も600枚になった時、ふと思い出した。千葉大の前川先生に送ってもらったヒトツバタゴの写真、別名ナンジャモンジャ(*Chionanthus retusus*)に心を打たれた。

人間もいつか自然がなつかしいのと同じく、植物も好きな土地がある事にきがつく。公害もなくひやりとする空気の美しい場所に美しく咲くシラネアオイに私は多くを教えられた。(写真20、21)

湿気のある清流に咲く花とは？

シラネアオイ(*Glucidium palmatum*)やササユリ(*Lilium japonicum*)の群生地を初めて、山ユリ(*Lilium auratum*)の群生に2カ所出合って、昨年はうれしく少し歩きました。母ちゃんの手をかり、私なりに里山や鍋倉や高社山で色々な出会いがありました。小鳥の巣も見つけ、山で会ったすてきな人にアツモリ草(*Cypripedium macranthum*)を見に連れて行ってもらい、それはうれしかったです。

植物の生き様を教えられ、人間の弱さを知り又、日陰で寒さに負けず美しい花を咲かせるジャコウ草(*Chelonopsis moschata*)に心をうたれ、自分のつたない心を知り、メモをとったものでした。よく見るとこの花のすばらしさは、山を歩く人に人の人間としての勇氣と正義と美しさをくれました。かくれた花



写真22 ジャコウ草 *Chelonopsis moschata*



写真23 山ユリ *Lilium auratum*
左：黄色球根1年 右：5年以上

長野県における山ユリ3種？

花びらの先端で急に曲がっている。雄しべは紅黒色。毎年花多い。



写真24 山ユリ①

花びら丸みをおびている。雄しべは明るい紅色。花は毎年1～2。



写真26 山ユリ③

花びらと花びらのきれこみ深い。雄しべは紅黒色。花は毎年1～2。



写真25 山ユリ②

として私はいつまでも心にしまっておきます。(写真 22)

若い山ユリが黄色球根なのはなぜ

飯山の里山で人の手が入らない山で最近見かけるユリ、それは日陰の中の雑木林で若い山ユリの一輪咲きが多い。タラの芽とりに行き、この場所を見つけた。枯葉、落葉、杉葉の中から、多少芽が出ていた。その中でタラの芽を取り歩くのですが、さみしさも感じていた。よく考えると杉はたしか植林ですが、40 年も人が入らない所に私に感じさせるすばらしい隠れ家だと思い、一人の主にしたくなった。自分の・・・？そんなとき、一輪の山ユリの球根を土から掘ったら黄色で、こんな若い花と頭にうかんだ。生きものは、病みついてはだめ、そんな事がうかんでなやんでいた。(写真 23)

葉っぱの上の露は純な心

ユリに興味のある自分はいつも里山へ出かけた。いつも行く山には、白いユリが多く、雑木の茂みでうす暗くさみしい。また、鍋倉山には白い花のササユリ (*Lilium japonicum*) が多かった。

その川にはサンショウ魚が生きた化石のように、石から石におよいでいた。ここは西山で私も初めて行った場所だが、今のところ場所は記さないでおく。何故か。それは皆赤いササユリだからだ。最近ユリ類が盗掘にあっているからだ。少し歩けるようになった私は、悲しい思いをした。ここは花が2輪咲いているのがわりとたくさんあり、近くにカンアオイ(東京都立大学院の菅原敬教授から、多摩丘陵のカンアオイと同じカンアオイ)を植えていた。それを見た私はこの場所にギフチョウがいると考え行く事にした。花や葉についている露はとてもすきとおっていて、恋人の心のように吸ってのんだ。(写真 27)

鍋倉山の茶屋池の不思議

緑あふれる林の中に 200㎡ぐらいの広さの池がある。透き通った風が湖水にあたっていた。周りのブナ林からこもれ陽が射している。杖つきつき林に入る足取りもおぼつかないが、以前高橋勤先生といっしょに入り教わった思い出の地であった。少しはいると池についた。チシマザサやヤマツツジが咲いていた。そのほとりにハイハマボッスの小さな白

い花が疎らに咲いていた。池のふちに。でも、今は少なくなりさみしい。さほど美しくないのに、ただやさしい女のように無口なところがすてきでした。海辺にしか生育しない植物がなぜ、なぜ？このような花はいつまでも大切にしておきたい。苔の中で生きている。生きる力は私と同じだ、と、脳梗塞の自分に言い聞かせていた。しばらく一言で言い、人生のすばらしさにうっとりしていた私だった。(写真 28)

日本一のナンジャモンジャ

阿弥陀堂で出合った千葉の親子をかあちゃんが連れて来た。そんな事わすれていた 2005 年の冬、大雪に見まわれた。そんな日、私車いす。妻一人で毎日雪かたづけで大変だった。大雪のある日、千葉のあの川村さんの娘さんが来た。私手伝いに来ました・・・と言ひ、2泊3日休まず雪かたづけに精出してくれた。母ちゃんと私は心の中で涙流していた。聞くとニュージーランドに留学していたとの事。名前は「奈津奈」さんでした。お母さんの友人の前川さんもある時来て、田舎の自然を楽しんで帰った。ある日封書が来た。それは植物の好きな私に「前川先生のいる大学のキャンパスに咲くヒトツバタゴ」だと言って写真が入っていた。大きいのでたまげた。白い花はすばらしく美しい。純な心のように私をおどろかせた。研究会員の人にまだ大きいのを知る人はぜひ知らせてください。因みに私の家のナンジャモンジャは 2005 年に枯れていた。この大学の本は今ほもっと大きくなっているとの事です。お知らせまで。(写真 29)

植物研究会で地球温暖化について考えの提言もい

いのでは
たとえば山の頂上に行くと時々枯木に出会うと、大切な植物が枯れてかわいそうに思う。竜王の山に行くと、五葉松が枯れていた。また、小菅やまには「キタゴヨウ松」が6本かかっている。万仏山には「ヒメコマツ」が枯れたりしている。なぜか東の山には枯れた木がたくさんある。千曲川の西の山はあまり枯木がないのだが、虫食いの林がたくさんあった。神戸山の赤松は松くい虫にあい役所へたのむと一言「予算がない」でかたづけられた。今、自然の大切さの「むごたらさ」を考えさせられ、肩をおとした。もう3年お願いしたが、ことわれ、現場を知らな



写真 27 ササユリ (赤) *Lilium japonicum*



写真 28 ハイハマボス



写真 29 ヒトツバタゴ *Chionanthus retusus*
(別名ナンジャモンジャ)



写真 30 ササユリ *Lilium japonicum*



写真 31 ササユリ *Lilium japonicum*



写真 32 オキナグサ (飯山産)

い人の言葉に「おもみ」がない。

山の水のペーハーがあがるし、やまおくに生息する鳥を里で目にする。2月23日、庭の雪が1mほどあり、川に鴨が鳴いているなど、今まで聞いた事がなかった。今日は聞こえていた。又、夏のスキー場のゲレンデに帰化植物がたくさん咲き、毛無山1300mくらいの山頂にアキノキリン草が咲いていたり、ウツボグサの群生があり、標高の逆転の現象とも言えなくもない。最近の害虫も多種にわたっていると思う。川の汚れもままならない。たとえば白馬の大雪溪の葱平の雪のない場所に人間の糞の大きさに驚いた。そして人間の愚かさにも心痛む。私も3回ほど行ったが、袋に入れて持ってくるぐらい心して行くべきだ。これは、山の好きな私たちから良い方法の提言をしてもらいたい。

また、心のかてとして映画「殯の森」を見ると人間美しくなれると思います。

心をくれた笹百合

時に純白で時に桜色のこの花の純な心に私と妻はいつの間にか恋をしていた。2003年には増えていた。病院から退院した2007年、つえをついて美しい花をたずねていった。妻の心づかいに感謝した。この場所は2人の秘密にしていた林だった。すさまじい多さに心がおどった。写真を取り、山道を歩いてくるとあちこちに工事の残骸があった。コンクリートの惨害も散らばっている。人間のおそましさに涙する。それに負けず美しい花を咲かせる笹百合に2人してうれしかった。チシマザサの中に流れる小川の近くに咲いているこの花に少しみとれていた。今日見た花の数は236個あり、繁殖のすごさにおどろき、5年間の入院生活もむだではなかった。(写真30)

花は桃色だった

ナラの林やブナやミズナラやクヌギの林の中をいくとアベマキも少しあった。静かな林には「カンアオイ」や「ウスバサイシン」も群生していた。「シダ」類もあった。その中にササユリ (*Lilium japonicum*) があちこちにあり、妻と2人で数えてみて多さに驚く。ここは、あまり人の手が入っていなかった。しかも、ピンクの花が90%で白はほんの少しだった。あちこちに山ツツジが咲き、ウリハダカエデもあり、妻はうれしそうに「父ちゃん、良かったね。どうし

て、ここ知ってたの?」と言った。

この近くの川には、「クロサンショウウオ」 (*Hynobius nigrescens*) が増えていた。ここは、孫と来たところだった。蝶を取る人がいるのに心が病んだ。クロサンショウウオはなぜか大きくなると山の穴へ入って生活するらしい。孫は棒を入れて出していた。近くで咲いているササユリはにこやかに笑っていた。(写真31)

(一言知恵) 栃の実とは万病の薬

北信濃の農村では昔から栃の実を大切にし、保存していた。なぜって言えば、打ち身、切りきず、肩凝りにつけると直る。栃の実を一週間干しておき、35°の焼酎を入れた大きめのビンに栃の実をたっぷり入れて一年間漬け込む。それをつけると痛みやこりが直ります。

(一言知恵) 蜂に刺されたとき

どんな蜂でも人間を刺す。その蜂には毒があり、いち早く医者へ行く。なぜ?それは人間の血管に毒針が刺さると、やむなく体中に毒がまわり「ジンマシン」のように体中赤くなる。そんな時・10分でも早く病院へ行く事だ。病の時はサボテンを切って食べるかつけると良い。早くつける事だ。

(一言知恵) ホオ葉と笹葉の薬用

両植物の葉でつつんだ食物はたくさんあり、北信でも昔からたくさんつくられていた。ホオの葉には(マグノクラリン)や(マグノール)があり、健胃剤として腹病に良い。また、笹は解毒剤として使用している。

昔の人の事は現代にもいい影響を与えており、今がある。

シャクナゲが咲いた

5月の連休近くの2日、朝母ちゃんが私のベットに朝食を持って来た。その時、「父ちゃん、シャクナゲ (*Rhododendron brachycarpum*) 」と言って、一輪持って来た。9年目でまだ30cmなのに淡紅色か白に見えていた。志賀高原にて種をひろって来たのが平成11年でした。コナラの下に植え、今(平成20年5月2日)咲いてくれました。このことが、私にすごい癒しを与えてくれて、うれしさに母ちゃんと手をにぎり、うれしさを共有した。種の事は母ちゃんも知っていて、共に花に礼を言った。ベットの部

屋の窓に、コップに水を入れてさしてくれて、部屋が明るくなった。うらの道には、阿弥陀堂へ登る車の音がうるさいほどしている。庭にはツバメが飛びかい、時々蛙が鳴き、春らしい音がした。今日も母ちゃんが私の為に働きに行った。庭には八重桜と黄桜が咲いていた。母ちゃんにうれしい涙がなぜか流れていた。自分の車いすが涙でよごれていた。

先週、宅老所あいあいへ行くと、介護師さんが自分の家の裏山に自然にあったのをおじいさんが鉢に植えてくれた花・オキナグサ (*Pulsatilla cernua* Spreng.) を3鉢持って来てかざってあった。昔は斑尾山にもあったが、めずらしかった。(写真 32)

「密標」とはどんな花にあるのか

この頃、花一つをじーとみつめる日がつづく。その花に何か不思議なものを感じた。それは、「密標」は何の役目をしているのか、と考えはじめていた。紋様は花によりちがいが、見ているとなかなか人間の心を動かす。私が種から育てた「シャクナゲ

(*Rhododendron brachycarpum*)」が今年8年目に咲いてくれた。その花をコップにさして眺めていると「密標」があるのに気づく。それは5弁の花の一枚に「密標」があった。カタクリの花の密標は、花全体の中心に桜の紋様になっていた。皆ちがう紋様なので調査するといいい。シャガにも「密標」がある。私の感じでは、この「密標」は花が蝶や虫をよび早く受精を促しているのではないかと。ただ、「密標」には赤色が多く、白と青は少ないのが分かる。点で書かれているのと、線で書かれているもの。植物の花の知恵のすばらしさにふれた。背のひくい花に多いのも事実であった。ただ黄色にはなかった。

これから多くの花を調査するのも面白いのではないかと。ユリ類にはたくさんの「密標」があった。またテッポウユリ (*Lilium longiflorum*) は鱗茎片や種でも増える。山シャクヤク (*Paeonia japonica*) にも時に密標があり、種で増える。バイテクの分野での技術で21世紀をリードしたいものです。「密標」のある植物や花を調査して、そのメカニズムを知りたい。